

XenosagaI・II - 第十五話 紛争 - Konflikt -

ヘルマー：ミルチアのクーデター勢力は、やはり再度の要求を拒んだそうだ――

ユーリエフ：ヨアキム・ミズラヒの引き渡しはできない――か。

ヘルマー：旧政府軍め、なにを目論んでいる。

ユーリエフ：ミルチア旧政府といえば、移民船団とのつながりも深かったはずだ。
そちらはどう言っている？

ヘルマー：36時間前、教皇の勅使が連邦主星に到着した。

彼らからも旧政府軍に投降を呼びかけ続けているが、応答はないようだ。

ユーリエフ：ふん――茶番だな。

いずれにせよ、二度の降下作戦の失敗があったくらいで、引き下がるわけではなかろう。

第三次降下作戦――せいぜい200から300時間後といったところかな、ヘルマー中将？

ヘルマー：残念だが、元・枢機院議員といえど、在野の方にお話できる事項ではない。ご理解いただきたい。

ユーリエフ：まあ、君の職責からすると、もっともな解答だな。

よかろう、私は独自の判断で、U.R.T.V. 部隊の投入を急がせるとしよう。

ヘルマー：ウ・ドゥの消滅――たしかにやらねばならぬことと理解はしているが――

本当に、それをあの幼い少年たちに担わせてしまってよいのだろうか。

ユーリエフ：くどいぞ、ヘルマー。あれらは少年ではない。――生体兵器だ。

ヘルマー：――

シオン：ついに――始まったのね。

ジギー：ツォアル事変の最終局面、ミルチア紛争――か。

Jr.：そうだ――

サクラが死んでから、ヨアキム・ミズラヒの研究は、より過激なものになっていったらしい。

その研究成果を手に入れた旧政府――ミルチア教主国の残党が自治州政府を制圧して、

クーデターを起こして、一か月。星団連邦も、ようやく本腰を入れ始めたってわけさ。

ケイオス：ひとりの少女の死が招いた、星間戦争――というわけだね。

Jr.：ここは俺の記憶を再現した仮想空間――

変えられない過去を見せつけられるってのは、たまらないよな。

シオン：Jr. くん――

Jr.：心配いらねえよ、シオン。

俺がいまやるべきことは、アルベドのトラップを見つけ出して、モモの意識を救うことだ。

過去の代わりに、現在[いま]を救ってみせる。

目的を見誤ったりはしねえ。

シオン：――うん、そうよね。

（――Jr. くんの言うとおり、私も、変えられない過去にこだわっちゃいけない

そうよね、ネピリム――）

ケイオス：もう、干渉するつもりはないのかい？

――ネピリム。

ネピリム：ええ、あの時は調停者として力を使いすぎてしまった。

でも、本来の私は”時を見つめる者”――あとは、ただ見届けることにしようと思う。

きっと、シオンたちなら――

ケイオス：そうだね。僕もそれがいいと思うよ――

紛 - Konflikt - 争

???：ニグレドさま――

ガイナン：誰だ、俺をその名で呼ぶのは？

???：もうじき、時が至ります。目覚めの地へ、おいでください――

ガイナン：なんだ、なにを言っている？

???：――――――

ガイナン：誰だ、お前は誰なんだ――

ガイナン：――メリィからの連絡は？

シェリィ：先ほど、経過報告がありました。エンセフェロンダイブ、かなり難航しているようです。

ガイナン：そうか――Jr.、つらい想いをしているかもしれんな。

シェリィ：――ええ。

ガイナン：こちらも、ただ座して待っているわけにはいかんな。打てる手は打っておこう。
――連邦主星[フィフス・エルサレム]へ行ってくる。

シェリィ：ガイナン様、またそれはなぜ――

ガイナン：ちょっとした考えがある。こちらはまかせてもかまわないか？

シェリィ：は、はい、お気をつけて――

ガイナン：ああ、急いで用件は片付けてくる。

（――用件？ 打つ手とはなんだ？

なぜ俺は――連邦主星に行かねばならない？

なぜだ――）

モモ深層領域

シオン：ここは――

ジギー：見覚えがあるな。天の車、か。

Jr.：いや、天の車はこの時点ではまだ、ミルチアの衛星軌道上にある。ここはネピリムの歌声発生装置――
紛争終了直後に、天の車に中枢ユニットとして組み込まれることになるんだが、
いまはまだ、ミルチアの地表で完成したばかりのはずだ。

シオン：（ここが、母さんの病院の窓から見た場所なのね――）
じゃあ、この後――

Jr.：ゾハルとの連結実験が行われて、グノーシスをこの世界に招き入れることになるわけさ。

シオン：Jr.くんたちは、ここでなにを？

Jr.：U.R.T.V. 部隊が作られた目的を果たそうとしていた。――ウ・ドゥとの対決さ。

ケイオス：急ごう。十四年前のとおりだとしたら、もうあまり時間がない。

Jr.：――そうだな。

ルベド：――はあ、はあ。ここが、目的地か。

ニグレド：ああ、データと一致する。間違いはないみたいだ。

シトリン：――――！

ニグレド：シトリン！

血だ――頭から？

ルベド：旧政府軍とやりあった時か？

ニグレド：うん、僕をかばってくれて――ケガしてたなんて――

ルベド：ニグレド、お前なんか変だぞ。

ニグレド：え、そうかな？ どこが――

ルベド：集中力が皆無だ。そういえば、作戦が始まる前、親父と二人で話してたな。

ニグレド：（――――！）

ルベド：あれから、なんか変だ。おい、なにがあった？

アルベド：ルベド、ニグレドはなんでもないって言ってるじゃないか。はやく作戦を始めようよ。

ルベド：――――――

――そうだな、アルベドの言うとおりで。

何人、ついてこられた？

ニグレド：――五人というところか。

ルベド：くそっ、だいぶやられたな。

アルベド：問題ないさ。僕がブースターになるんだから、雑魚の数なんて、どうでもいい。

ルベド：アルベド――

アルベド：さあ、始めようよ、ルベド――僕たちはそのために来たんだ、ううん、創られたんだから。

ルベド：お前、なんか変だぞ――

――いや、変なのは俺か。たしかに、俺たちはこの時のために、訓練してきたんだもんな。

よし、精神連鎖[リンク]展開――全U.R.T.V.、固有波を俺にあわせろ！

アルベド：うう――

ルベド：――ん？ おい、来るぞ、ウ・ドゥの波動だ！

アルベド：――ひっ、ルベド、怖いよ！ 手を離さないで！

ルベド：集中しろ、アルベド！ 押し返すんだ――訓練通りにやれば間違いはない！

ニグレド：（やっぱり、僕はなにも感じない――”処刑人”としての機能故か――）

ジギー：なんだ、あいつは！

シオン：U.R.T.V.のみんなには、見えていないの！？

Jr.： ああ、十四年前にあんなヤツが出た記憶なんてねえ！

ケイオス： ならきっと、倒すのが正解だね。

シオン： ええ、やりましょう！

【 戦闘 VS 汚染体 $\beta \times 5$ 、汚染体 γ 】

ルベド： ぐううつ。

アルベド： うわあああっ。

U.R.T.V.： —————！

U.R.T.V.： —————！

ニグレド： みんな、どうしたんだ！ 大丈夫——？

ルベド： く——このままじゃ、俺たちの身体が——
——っ！

いま見えたのは——

なんてこった——

ニグレド： ルベド、どうしたの！

ルベド： ——緊急回避！ 精神連鎖[リンク]閉鎖だ！！

ニグレド： ——え！？

ルベド： 精神波動とはいえ、力学的には、反存在衝突の一種だ。俺たちは、ウ・ドゥとともに消滅する。

親父め——全部、知ってやがったんだ！

ニグレド： もう連鎖[リンク]は完成してる、止まらないよ！

アルベド： イヤだよ、ルベド——離さないで！

ルベド： ダメだ、遮断する！

アルベド： 離さないで——ルベドオオオッ！

U.R.T.V.： あああああ——

U.R.T.V.： ぐああああああああ——

アルベド： うわああああ——

ニグレド： ルベドオオッ！

シオン： いったいなにが——

Jr.：みんな手をつなげ！ 弾き飛ばされるぞっ！

シオン：ええっ！

ジギー：これはいったい――！

Jr.：ウ・ドゥへの抵抗をやめたんだ。衝撃の余波が一気にこっちへ来る！

――

『標準時4月7日未明――惑星軌道上に展開した星団連邦軍治安維持派遣艦隊は、我がミルチア教主国政府の対話要請に応じることなく、三度目となる降下作戦を惑星全域で展開しています。これにより、各所で激しい戦闘が勃発しており――市民に多数の犠牲が出ている模様です。この非常事態に際して、政府は星団連邦に対し――』

――

シオン：――――！

ケイオス：気がついたかい、シオン。

シオン：ケイオスくん――ここは――――

ジギー：首都ダスグプタの市街地だ。どうやら、飛ばされてきたらしい。

Jr.：ウ・ドゥとU.R.T.V.たちの激突による、反発作用でな。

シオン：！ じゃあ、ここはもう――

Jr.：そうだ、第三次降下作戦がはじまっている。

ここも戦場――ミルチア紛争の最終局面さ。

今日ですべてが終わる。たくさんの人が死に、この惑星は封印される――

ジギー：いったい、アルベドはどんなトラップをしかけたというのだ。

Jr.、我々がお前の過去に立ち会うことに、どんな意味がある。

Jr.：俺が知るかよっ！

――――悪い。

シオン：Jr.くん――――

ジギー：気にするな、Jr.、お前の動揺を誘うこと、平常心を乱すこと、それらすべてが、ヤツの狙いの一部に違いあるまい。

Jr.：一部？

ジギー：そうだ。それらは目的ではなく、手段に違いがないからな。

Jr.：――――

――あいつらしいぜ。

ケイオス：！ Jr.、あれを見て――！

Jr.：――ニグレド！

ニグレド、ニグレド――！

シオン：ダメよ、Jr. くん！ 頭にケガしてる。安静にさせてあげないと――

Jr.：そんな――

おい、お前がこんなんで、誰があいつらを止めるんだよ。

シオン：あいつら？

ジギー：ウ・ドゥに精神汚染された U.R.T.V. たちだ。

いつぞやのエンセフェロンで、彼らが市民を虐殺している光景を見た。

シオン：それを止めたのが、ニグレドくん――

Jr.：ああ――なのにニグレドが――どうなってやがる。

――――！

――――ちくしょう、念入りなトラップだぜ。

ジギー：どういうことだ？

シオン：ここが過去を再現したエンセフェロンだとしたら――

Jr. くんは記憶と矛盾する事件は起こらない――

そして、そのニグレドくんに触れることはできないはず。――――そういうことでしょう？

Jr.：ああ――――

ケイオス：でも、これがトラップであろうと、僕たちがやるしかない――そうだろう、Jr.。

Jr.：わかってる――その通りだ。

シオン：私たちがやる？

ケイオス：本当ならこの後、ニグレドは兄弟の暴走を止めて、ひとりでまたネピリムの歌声に向かうんだ。

Jr.：そこで俺と一緒に、ウ・ドゥと接触しようとするアルベドを止めた。

そして、力尽きた俺たちは、ケイオスとカナンに救われたんだ。

ケイオス：行こう――U.R.T.V. もアルベドも、いまは僕たちにしか止められない。

ジギー：なるほど、その通りかもしれん。

シオン：わかったわ、行きましょう。いまは、それしか道はないものね。

U. R. T. V. : ———— !

【 戦闘 VS 汚染体 α 】

@: ありがとう——

U. R. T. V. : ———— !

【 戦闘 VS 汚染体 α 】

@: サンキュー——

U. R. T. V. : ———— !

【 戦闘 VS 汚染体 α 】

@: わーい、ありがとう—— !

U. R. T. V. : ———— !

【 戦闘 VS 汚染体 α 】

@: かたじけない——

U. R. T. V. : ———— !

【 戦闘 VS 汚染体 α 】

@：助かったわー

U.R.T.V.：―――！

【 戦闘 VS 汚染体 α 】

@：助かったぜー

U.R.T.V.：―――！

【 戦闘 VS 汚染体 α 】

@：もっと早く助けなさいよ！ でも、一応お礼は言っておくわーありがとー

U.R.T.V.：―――！

【 戦闘 VS 汚染体 α 】

@：すまないー助けられちゃったようだなー

@：お姉ちゃんたち、ありがとー

ジギー：これでー全部か？

Jr.：ああ、後はアルベドだ。ネピリムの歌声発生装置へ急ぐぜ。

ネピリムの歌声

アルベド：よく来たね、ルベド。ニグレドはどうしたんだい？

ルベド：アルベド――

アルベド：ふふふ。

ルベド：ぐうっ！

アルベド：くひひ――

きひひひひ！

歌、歌声が――僕を――ひゃはははは！

Jr.：アルベド！ ちくしょう、もうウ・ドゥに――

アルベド：鏡よ――僕を映せ――僕を定義しろ――！ うひゃひゃ！

僕は無限のテロメラゼだ――僕は反存在なんかじゃない――完全なる連鎖だ――！

あーっはっはっはっあーっはっひゃっひゃははっはっははひゃひゃひゃはっはーひゃひゃっひゃひゃひゃひゃはは！

Jr.：アルベドオオッ！

アルベド：ひゃはははははははははひゃはははひゃひゃっひゃひゃひゃひゃははひゃははっははひゃひゃひゃははは！

ひゃはははひゃはははははひゃはははははっひゃははひゃひゃひゃはははひゃひゃっひゃははひゃひゃははひゃ！

Jr.：同じか、あのときと――

【 戦闘 VS アルベド 】

アルベド：ひゃははは、素晴らしいよ！ ウ・ドゥの力は――！

ようやく手に入れたんだ！ この間は、あの女に邪魔されたからねえ――

Jr.：あの女――まさか、サクラか！

（そう、十四年前も俺は、アルベドにこう問いかけた――）

アルベド：そうさ、あの女がいけないんだよ。僕がウ・ドゥによって進化しようとするのを、邪魔するからさあ！

Jr.：お前がサクラを？ ウソだろう！？

（ウソであつたら、どんなによかったか――）

アルベド：やっと気づいたのかい、ルベド。そうさ、僕が殺したんだよ。あの女は、僕のせいで死んだのさ！

Jr.：アルベドオオッ！

（そうだ、だからこの十四年間、俺はお前を――！）

アルベド：無駄だよ、ルベド――

僕はこんなことで滅んだりは一しな――

Jr.：だったら、今度はきっちり終わらせてやらあっ！

あのときと同じことを、繰り返してたまるかっ！

うおおおおおっ！

ケイオス：いけない、Jr.！

シオン：Jr. くん――！

モモ：いけ――ない――

これは罠です、Jr. さん――

サクラ・ミズラヒ『これは罠だよ、ルベド――』

Jr.：うおおおおおおおっ！

サクラ・ミズラヒ『ルベド、だめ――――！』

Jr.：アルベドオオオッ！！！

アレン：――主任！ エンセフェロンフィールド構造体が急速な崩壊を始めています！

システムの異常ではなく、モモちゃん側に、依然、トラップが残存していた可能性が！

シオン：そんな、エンセフェロンダイブの可能性も見越していたの――！？

ジギー：アルベド――といったな、あの男もサクラ・ミズラヒの知己だったのなら、

ここへJr.を降ろすのも予定のうちだったのかもしれん。

アレン：あ、これは――エンセフェロンへのバイパス侵入！？

Jr.：うおっ！

ぐうう――やっとな――現れたな、アルベドオオ――ッ。

アルベド：いい匂いだ、ルベド。怒りが全身を駆け巡って、気化する匂い――

ノルアドレナリン過剰なんじゃないか――ん？

Jr.：ぐ――てめえ、なんのために、あんな、あんなトラップを！

ジギー：Jr.！

シオン：落ち着いて、Jr. くん！ 兄弟とこじれたまはは哀しいんでしょう！

アルベド：こじれる――？

俺とルベドは、これでも仲がいいんだぜ。お嬢ちゃん――

Jr.: ぐお、うおおーア・ル・ベ・ドオオー

アルベド: そうそうそうそう!

その調子だよ!

来いっ! 積年溜め込んでいたものをぶちまけろおおっ!

Jr.: ぶっ飛ばすぞーてめえはー生け捕りだー

アルベド: いいねえ、やってみろ!

Jr.: うおおおおおおー

アルベド: ひゃああああああっ

シオン: 駄目よ、Jr. くん! 戦ってつらい思いをするのはー君の方!

ジギー: いかん、Jr. は力を制御できていない!

アルベド: ああ? そんなことはない、誉めてやれよ、ルベドは充分に感情を抑制してる。

なあーお前の感情のほとばしりは、本来ならこんなものじゃないもんなあ。

Jr.: うおおおおおっ!

アルベド: だが、体が闘いを欲しているのさ。なにしろ俺たちはー兵器だからなあ!

モモ: やめてー

やめてっー

ああっー

アルベド: かかったな、ペシエーおまえは本当に純粋で扱いやすいよ、機械仕掛けの天使ー

ミズラヒも酔狂な男だ、ヒトに似せた心など持たせない方が安全だったろうにー

Jr.: てめえ、このために、俺を怒らせてー

アルベド: ひゃあっはははは!

モモ: あああああああああっ!

Jr.: どうした、モモ! 苦しいのか!?

シオン: ーY 資料!

膨大なデータの奔流が、モモちゃんの出力機能の限界を超えてるんだわ!

Jr.: んだと!

シオン: このままじゃ、モモちゃんのインターフェイスがーううん、心が破壊されてしまう!

モモ: ! ! ! ! ー

Jr.: くそっ、どうにかなんねえのかよ!

サクラ・ミズラヒ『心配しないで、ルベドー』

Jr.：――サクラ！？ お前、どこに――

サクラ・ミズラヒ：私は――ルベドのそばにいたんだよ――

Jr.：俺の――そばに！？

サクラ・ミズラヒ：伝えたいことがたくさんあるけど、いまはやらなきゃならないことがあるから――

Jr.：サクラ！

サクラ・ミズラヒ：さよなら――そして、ありがとう、ルベド――

Jr.：サクラァァァッ！

モモ：ああ――もう耐えられない。

モモの精神[こころ]、このまま、崩れていくのね――

サクラ・ミズラヒ：ううん、そんなことにはならない。いいえ、させない――

モモ：あなたは――

サクラ・ミズラヒ：私はずっと、ルベドのなかにいた。でも、言葉を届ける方法がなかった。

ありがとう――あなたの深層領域に残された、私の内的世界を介することで、

やっと私は、ルベドと話すことができたの――

モモ：よかった――モモ、お役にたてたんですね。きっとパパも喜んでくれる――

サクラ・ミズラヒ：だから、今度は私があなたの力になる番。

私の内的世界を、Y資料の流出経路に設定するね。

モモ：そんなことしたら――！

サクラ・ミズラヒ：――いいの。私の時間は、もう十四年前に止まってるから。

モモ：そんな――――

サクラ・ミズラヒ：これからは、あなたがルベドの――Jr.のそばにいてあげてね。

私の妹――――

モモ――――

モモ：うん、約束します、私の――サクラお姉ちゃん。

U.M.N. 管理センター

Jr.： モモ、モモ――

モモ： ああ――――Jr.――さん。

Jr.： モモ！

シオン： モモちゃん、意識が戻ったのね！

――Y――資料は――？

ユリ・ミズラヒ： 流出したわ――この十四年間、我々がもっとも恐れていたことが――

”鍵”が奪われてしまった――時局は動き出した、もう止まることはない――

－ 

アルベド： これだ――深淵の鍵――ミルチアを呼び覚ます福音の音だ――

ルベド、見ているか！ さあ、俺たちの新世界で待ってるぜ――

－ 

ガイナン： ――アルベド？ 奴め、ついにY資料を手に入れたか。

オルムスの走狗と化した、不肖の息子め――

――――――

――息子？ 俺はいったい、なにを――

う、うう――

シトリン： あなたも、私と同じなのよ。

ニグレド： 同じ？ 君と？

シトリン： コードネーム”レッドドラゴン”――有益だけど、暴走の可能性が高い危険な生き物。

私たちの任務はそのレッドドラゴンの暴走を防ぎ、制圧すること――

不思議に思わない？ なぜ自分は、ウ・ドゥ・シミュレーターに反応しないのか？

ニグレド： ――！ まさか、それ――

シトリン： その通り。レッドドラゴン――赤くて――大切なもの。

私たちはその貴重な生命を育み、殺すために――ディミトリさまに選ばれた――

ニグレド： 選ばれた――

ガイナン： うう、ああ――

ユーリエフ『ニグレド、来なさい――』

ガイナン： なぜ、いま思い出す――

ユーリエフ： ウ・ドゥ消滅に行きたくないだと？

ニグレド： いえ、でも僕――

ユーリエフ： 第三次降下作戦ははじまった。間もなく、ミズラヒは”扉”を開けるだろう。
もう、時間がないのだ。ニグレド、来なさい――

ニグレド： あ、ああ――

――いやだ。僕は任務を放棄する――

貴方の指示になんか、従わない――

ガイナン： いやだ、やめてください――

ユーリエフ『なにを怖れる、お前はこのときのために、産み出されたのだ。』

ガイナン： あああああ――――

???： う、うう――

???『お目覚めを歓迎いたします。

――ディミトリさま。』

ユーリエフ： ――U. R. T. V. 668 か。

シトリン『はい、念話などという無粋な方法でこの地にお招きしたこと、ご容赦くださいますよう。』

ユーリエフ： かまわぬ。眠っていた私には、Y資料流出を察知する方法がなかったからな。

お前の働きに感謝する。それよりも、現在は何年だ？

シトリン『T. C. 4767 になります。』

ユーリエフ： あれから十四年か――

目覚めまで、こうも時間を経るとは思わなかった。――戦局は？

シトリン『至極、混迷しております。この十四年の間に連邦は疲弊し、多数の泡沫勢力が乱立しております。』

ユーリエフ： ウ・ドゥは？

シトリン『十四年前、U.R.T.V.のひとりが部分的に接触。中規模の局所事象変移を発生させました。』

ユーリエフ：ほうー666ーいや、667だな。

シトリン『その通りです。以後は二重ラックホールに阻まれ、現在も存在状況は確定できません。』

ユーリエフ：わかったーザルヴァートルの戦力を拡充させておけ。

後の行動は、追って指示する。

シトリン『了解しました。ところでー

お加減はよろしいのでしょうか？ そのお体に慣れるには、時間も必要とお察しいたしますがー』

ユーリエフ：いや、快適だ。延命にも限界があるからな、結果としては望ましい方だ。

”息子”の体は、至極馴染みが良い。私を殺した息子だがなー

デュランダル 

Jr.：ーそうか、サクラがそんなことを。

俺、気づいてやれなかったんだな、サクラの居場所にー

モモ：でも、喜んでました。Jr.さんと話せたこと。

Jr.：ーーーそっか。俺も嬉しかったのに、伝えそこなっちゃったな。

モモ：いいえーきっと、伝わってると思います。

Jr.：ーーーさんきゅ、モモ。

ーーーーー

Y資料、アルベドの手に渡っちゃったな。

モモ：ええー

Jr.：きっとこれから、忙しくなる。サクラはいなくなったけど、モモがいてくれる。

いろいろ手伝ってくれよ、俺のそばでさ。

モモ：ーーーはい！

Jr.（サクラーお前との約束、果たせたのかな、俺ーーー

でもこれからも、俺はモモを護る。お前との約束でなく、俺の意志でさーーー

それで、いいんだよなーーー

さよなら、サクラーーー）

